

「携帯電話恐るべし」

(2013)

3. 11に日本を襲つた東日本大地震・大津波・放射能パニック・・・平和ボケ、安全ボケに浸つていた日本人は今、崖っぷ淵に立たされている。地殻の破壊が宮城県沖から北と南へ500kmに及び進んでいったが、南下していくた破壊は、房総沖にあるフィリピン海プレートの北東端に遮られ止まり、幸いにも紙一重で首都東京が破壊・水没を免れた。だがこの奇跡は殆ど報道されていない。更にはこの地殻変動が今後の東南海地震へ何らかの影響を与えないかという心配を抱かざるを得ないが、専門家に言わせればそれはないという、そうだろうか？

それにもしても大災害時の最後の救いである「携帯電話」がすっかり機能停止に陥つたが、この技術大国日本にしてはお粗末この上ない。

今や携帯電話というよりは「多機能携帯（スマートフォン）」の時代、世には電波とネットが所狭しと飛び交つてゐる。2010年秋ついに携帯大手3社の多機能携帯が出揃つたが、高齢で衰え始めた僕の眼でこんな小さな画面のネット情報や電子書籍を見ようとは思つてもいいのですんなりパスさせてもらつた。もつとも目の弱つた高齢者にこそ、拡大自在のこの電子書籍こそがお勧め・・・と言つのを聞いたことがあるが・・・！

それどころか今やツイッターやフェイスブック等のソーシャルネットワークサービスの出現により、人と世の中の行動基準の様変わり振りに

は怖いまでの感慨を覚える。今年の、中東・アフリカに席巻し始めた政
変の嵐にみられるように世界の動きをも変えてしまう迄に増殖し続けて
いる。

バブル真っ盛りの時・・・80年代の終わり、僕はバブルの真只中の
東京のど真ん中で、バブルの申し子の様な「湾岸再開発」の仕事で、「本
社ビル」というバベルの塔の建設に携わっていた。当時携帯電話も駆け
出しの頃で、ゼネコンの現場の所長さんの車のコンソールに鎮座してい
たり、中にはバブルの申し子の様な某専門業者さん達が重そうな携帯電
話機を肩に背負つて現場を闊歩していたのをつい先日の事の様に思い出
す。

あれから僅か20数年、世の中は今や携帯無くして何の世か・・と言
わんばかりとなってしまった。小学生から高齢のおじいちゃんおばあち
ゃんまでが携帯を手にしているのが当たり前の世の中になってしまった。
携帯の無かった自分の学生時代を振り返つてみて、あの日のあの時、も
しも携帯というものがあったら・・・とつまらん想像を巡らしている・・・
一方得た物の替わりに僕の中から失われたものは何だったのだろうかと
今思い返す。

そんな僕も遅まきながら、21世紀に入った年に初めて携帯電話を持
った。電話と携帯メールなるものが自由に使えるようになつた。折しも
隣町に住む高齢の両親達の介護生活も始り、緊急事態に備えて、この携

帯を手放せない生活が身についてしまった。そんなこともあり我が家の固定電話に掛かった電話も瞬時に携帯に転送するようにし、又自宅のパソコンが受信したパソコンメールも瞬時に携帯に転送できるように設定し、お蔭でどれだけ助けられた事か、便利な世の中になつたものだ。

その5年後、僕の携帯は2台目に代わり、新たにカメラ機能（150万画素）の付いた物になり当時とすれば結構便利に使わせてもらつていた。携帯本来の電話・メールは勿論の事、僕にとつては何よりもカメラがいつも手元にあるという便利さを満喫させてもらつた。当時としては最新鋭のカメラ付だったこの2台目の携帯電話だが最近の新機種の高性能振りにチラチラ食指を動かされていた折も折、遂にこの携帯電話がダウンし丁度良い買い替え時となつた。3台目の携帯は、カメラは更に高性能化し、ワンセグTV、お財布携帯、ナビ機能も利用出来て便利この上ない。インターネットに侵入すれば使い方はまだまだ無限に広がるが、眼も弱くなつた高齢の身では携帯のような小さな画面でネットを利用しようとは思わない。それよりも電話とメールとカメラ、TVに加えるにラジオ（FM、AM）が付いていれば我々年配者には助かるのだが・・・とDOCOMOの窓口嬢にはひと声叫びつけておいた。

「携帯電話を持つ」のに抵抗を感じる人は意外に多い。親指一本で未

知の世界に遊び、夥しい情報を享受している今の若者達ならイザ知らず、

眼も衰え、デジタルの嵐に辟易としている特に我々の世代の人間はどちらかと言うと携帯アレルギーの者達が多い。曰く、折角の自分の自由な時間を携帯しているのに邪魔されたくない・・・